

# 文教協会50年を振り返る①



設立年の昭和39年

文教協会事務局

昭和39年11月7日(土)、大垣市文教協会が発足しました。事務局には、先生方や関係者の皆様方による発足にいたるまでの足跡(文章資料)が残されています。それによると、同年8月21日に市役所4階の第一会議室にて、「大垣市教育の振興に関する会議」と題し、話し合いがもたれました。

これは、大垣市教育研究会が、『文教都市大垣の近代的再現』を目指し、(仮称)「大垣市文教振興会」を設立しようという気運が高まってきたことを受けてのようです。

その後、数回の検討委員会が開催され、まとめられた草案を「教育研究会報」昭和39年9月12日号外として提案されました。

当初の構想案を紹介します。



## 1. 目的

- (1) 大垣市民全員が文教を尊重し、大垣教育をバックアップするムードを盛り上げる。
- (2) 教育者の資質の向上と教育精神の振興につとめる。
- (3) 教育施設、設備の充実活用のため世論を喚起する。

## 2. 組織

- (1) 常に大衆的基盤にたち、中正を維持する。
- (2) 会員自らの会であることを明確にし、主体性を維持するため会費を分担する。
- (3) 市民全体の会である実をあげるため、各人それぞれの持ち味を生かし、協力体制をとる。
- (4) 個人加入を原則とする。

## 3. 事業

- (1) 教育者の研究組織を整備し、継続的に指導者を配置する。
- (2) 研究成果を整備し、各会員に浸透させるため研究会報を刷新増強する。
- (3) 教育講演会、講習会等を開催する。
- (4) 研究の助成をする。
- (5) 各種文庫を設定する。

—なお将来計画として—

- (6) 会員の海外派遣を考慮する。
- (7) 会員の会館を建設する。

## 4. 事業進展の順序

始め学校教育の振興に重点を置く。

学校ならびに教育関係者をまず会員として順次一般市民の加入を勧誘する。

第1回 文教総会の式次第を紹介します。

期日；11月7日(土)

会場；興文小学校

日程；9：00～総会

視察報告会

11：30～昼食

12：30～記念講演

講師 国立教育研究所長 平塚益徳 氏

演題 「世界の中の日本の教育」

## [進む少子化]

児童・生徒数(昭和39年)

小学校児童数 10,010名

中学校生徒数 6,308名

計 16,318名

ちなみに平成23年は…

小学校9,348名、中学校4,524名

合計、13,872名でした。

では、「文教都市大垣の近代的再現」とはどのようなことを意味しているのでしょうか。当時の山田光之介教育長のことばの全文を紹介します。

### 「文教都市大垣の近代的再現」

山田光之介 氏

言葉は古いけれども、教育があらゆる事の基盤をなす、ということにあやまりはない。従って、教育は第一義的に尊重されなければならないのである。これは、大垣市民ひとりひとりの幸福、あるいは大垣市の発展のためではない。わが祖国のためにも、そして民族のためにもそうなのである。そういう立場で、われわれは、学校教育指針に「文教都市大垣の近代的再現」の提言をしている。

われわれの先輩はもちろん、われわれ自身も、文教都市大垣を誇称する。しかし、何が故に本市を文教都市というのか、という理論は必ずしも帰一しない。ある人は戸田藩の文教政策をあげる。そしてまた、他の方々は博士の町をいう。これらはまさに誇るに足ることにはない。歴代藩主が文教を奨励し、その道の人材を登用し、そしてついに藩校設立におよんだことは史実に明らかである。まだ、明治21年5月、わが国に初めて博士号が生まれ、25名が選ばれた時に、本市出身の松本莊一郎先生が名をつらね、翌6月倍加して50名になった時にも、松井直吉、南条文雄の両先生が選ばれている。(大垣市史による。)おそらく当時の大垣は人口1万内外の田舎町であったろうに、博士総数の1割に近い数を出したということは、全国的にひとつの驚異であったちがいない。そしてまた、これが先鞭になって、陸続として有名な学者が輩出されたのだから、博士の町を誇称しても決して僭越のそしりを招くことはなかった。けれども子細の歴史をひもとけば、文教都市を誇称するに足る別の一つの条件があった。それは当時の市民がいかに教育を尊重し、これを愛し育てたかということである。興文百年史によると、明治の初期、興文校のために1口50銭2千口の講を起こして毎年200円の運営費を寄付し、さらに1万円の基金造成を企画している。しかも、この企画者は必ずしも生徒の父兄ではない。なお、学者、教育者を全国否外国まで求めた。長崎から招聘した名村先生のごときは、当時の金をもって月手当50円、銀3匁232匁給されていたのである。

われわれの市は今でもこの伝統を受けついでいる。市民のだれもがよい教育の理解者ではある。しかし全国的の視野に立って、敢えて文教都市と誇称する実をもっているであろうか。われわれはそこに不安を覚える。これを払拭し、近代的姿態において真に文教都市と高らかにうたう日を迎えたい。

近代的文教都市というのには、いくつかの条件があろう。大衆的であることはその基盤である。そして、少なくとも市民全体が心身ともに健康であり、広い視野に立って民主的教養を身に付け、文化・教育を尊重して、しかもそれが具体化し実践化され、なお実力と自信にみちた教師群がある、といったことがなければなるまい。これらが実現されれば、結果としておそらく人材の輩出も招来されるに相違ない。

この実現は容易ではない。しかし相携えてその実現に懸命の努力をしたいのである。

(教育研究会報 昭和39年7月1日 第24号 掲載)

時代を振り返る

#### 昭和39年の日本のキーワード

- ◇東京オリンピック開催
- ◇東海道新幹線開通
- ◇電卓登場(シャープ)重さ25kg 価格は53万円
- ◇初のスギ花粉症の症例が報告

#### 昭和39年の大垣市のキーワード

- ◇市役所の新庁舎完成  
大垣市民の歌できる
- ◇名神高速道路開通
- ◇青年の家落成

